

鵠 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 5 8 号

1 9 9 1 年 3 月 5 日

鵠沼の湘南学園について 遺稿 富士 山

富士山先生のあらまし 塩沢 務

古老に聴く鵠沼の昔古・パート2 編集委員

鵠 沼 を 語 る 会

鶴沼の湘南学園について

遺稿 富士^{たかし}山

昨今朝 小田急海岸駅を下車して片瀬より第一踏切りを横切って北上する男女学生、夕刻にはその反対逆道をたどって小田急の鶴沼駅で乗車して藤沢方面に向う多数の男女学生、これが湘南学園の生徒である。湘南学園が出来て以来60年以上にもなるのにこれ迄湘南学園について語られたことがない様に思う、先年鶴沼百年史という単行本が出版されたがそれにものって居ないようだ、私は湘南学園の設立当時から関係があるのでそれについて以下語らうと思う。

大正の終り頃だったかと思うが、時の藤沢町長隈川基氏（かつてはロンドンの日本大使館の駐在武官であった）が私を招いて鶴沼に幼稚園のないのは淋しいと、そこで隈川町長と私と小田急沿線の玉川学園長の小原氏がよって相談し鶴沼幼稚園をつくることにした、場所は今の湘南学園の小学部の隣にあった二階建の木造家屋であった、園児は3人であった。

私は幼稚園の校医ということになった、それから小学校も出来て生徒も段々増加し世界戦争の終った昭和20年には小学部は6年生程になり人数も100名位になった、中学部も出来、当時校長は宮下先生といわれた、中学の3年が卒業して新設の高校に生徒はすすんだ。

ところが宮下校長は自分の子供をその新設高校に入れないで慶応義塾の普通部に入れた、このことはひどく父兄の反感を招いた、宮下校長は新設の高等部が自分の子供を入れる価値のないものと思っているのかという具合である、宮下校長は遂に居たまらず校長を辞任し、下の宗先生

が校長になった。

世界戦争の終わった昭和20年には学園の総生徒数は300名位だったかと思う、或日私は学園の朝の体操を見にいった、敗戦後は一切いきちんと列を作る事は駐留軍により禁ぜられていたので、体操も列を作らずてんばらばらに集って、右を向いている者左を向いている者ばらばら、それが号令によって体操するというおかしなものであった、服装はてんばらばら、制服というものはなかった。

建物は始めは今の小学部のところに出来たが、追々生徒が増加して来て狭い市道をへだてて東の方に運動場を造った、更に4米道路をへだてて東の方に高等部が出来た次第である。

私は最初から学園の校医であったが、終戦後学園の全生徒にツベルクリン反応行い、陰性者にはBCGを注射した、これは神奈川県は勿論、全日本でも始めの行動であった、ところが当初のBCGは注射部位が化膿するので父兄から文句がでた、私は化膿は困るでしょうが、それにより結核にかからぬのだから、よいではないかと慰めた。

BCGは東京市の結核療養所の創業で作られたものであるが、東京市（当時の）では広く広く試験するつてがないと云うので、二つの学校（湘南学園と藤沢町立高等女学校）の校医をして居た私に東京市の療養所にいる友人から試験を頼まれたのであり、東京市、神奈川県はもとより全日本で初めての試みであった、その利用効果は認められるものと判明した。今湘南学園の発展を見るにつけ、設立の当初を思い出し感慨無量である。（S・61年7月16日92歳の記憶）

鶴沼の湘南学園について

富士

たかし

昨今朝 小田急鶴沼駅下車して片瀬
をリヤ一踏かりを横切つて上る男女学生、
夕刻にはその反対に逆道をたどつて小田急の
鶴沼駅下車して藤沢方面に向う多数の
男女学生、これが湘南学園の生徒である、湘
南学園が出来て以来60年次上にもなるのに
これ迄湘南学園について語られたことない様
に思う、先ず鶴沼百年史という単行本が出版

されたがそれにもつて居ないようだ、私は
湘南学園の設立当時からの関係者なのでそれ
について以下語らうと思う。

大正の終り頃だったかと思うが、時の藤沢町
長隈川基氏（かつてはロンドンの日本大
使館の駐在武官であった）が私を招いて
鶴沼に幼稚園のないは林いっど、そこ
で隈川町長と私と小田急沿線の玉川
学園長へ小原氏がついて相談し鶴沼幼
稚園をつくることとした、場所は今の湘南

——富士 山 先生のあらまし——

塩 沢 務

本原稿は、富士先生が61年8月1日奥様の入院看護がてら綾瀬厚生病院に同伴入院された後に入手したもので、お元気に退院後発行予定でしたが残念ながらこのたび発行の運びとなりました、96歳11月でした、謹しんでご冥福を御祈り申し上げます。

富士さんは奥様を先に送られ、平成3年1月24日死去されました。

「新坂元醫伯敬山居士」先生は明治27年2月15日石川県金沢に生れる第4高等学校・東京帝国大学医学部卒業（大正9年）。同学物療内科に於て真鍋教授ついて4年間研究。駒込病院にて伝染病の研究1年医学博士。医局在局中健康のため鶴沼6708に移り、研究の傍ら開業（大正11年）

当時別荘地として開発された、鶴沼海岸の地は結核療養者が多く、芥川龍之介（別紙）、川端康成等も診察した事がある。昭和16年東京螺子診療所長。昭和17年神奈川県医師会藤沢支部理事。終戦により軍需工場は縮少し、同工場診療所嘱託。昭和28年神奈川県技官となり、健康保険担当の主任技官として22間勤務された。藤沢市医師会内科医会顧問として保険研究会講師として後進の指導に当られた。

傍ら鶴沼を語る会、前代表伊藤節堂氏癌病のため二度に渡る入退院で不在の間、懸命に会を支え努力された功績には感謝申し上げる次第でございます。

昭和14年10月1日に認可設立された健康保険組合は、県下8番目の古い歴史をもっている。昭和16年に診療所が設けられ、同17年には当時の民間企業としては稀有な予防医学研究所を設立し、富士山医学博士を所長に迎えて従業員の健康管理に重点がおかれた。

富士山先生は湘南学園・藤沢町立実家高等女学校の校医も兼務されていた。

おわり

大正十五年七月二十九日

芥川龍之介が佐々木茂索宛の手紙

富士医師に診察を受けた

左雲奉誦、山本改造かへりて後、黒パンを食ひすぎて兄：一日三四回下痢し、再び富士さんの御厄介にお掛りになり、僕の胃腸がやがては薬餌療法では駄目なりと言われ、監視下でやしろうす。それでも兎に角薬を食ひ、やつと下痢だけとまることをはたり。海水浴をすゝと此にのみかうあへてはられぬほど悲愴なるはうし。エサに候々家の前はヴァイオリン、後はラヂオと蓄音機、たはラッパ、右はハアモニカ、後の又後は鼓と鼓、と云ふ始末、お金がつけば西海岸へ引き越さうかと思つてゐる。兎に角僕も所後丁二件目の近所を歩きつた外、西海岸の家の前へお寄りしことを知る。懐かたり、そこへ居のやうな、相張りに余り感心せず。見ればようし。一り概して装幀はバビロニアだ。：かゝる。景さ。はうさいもんぢや(コレハ室生調)

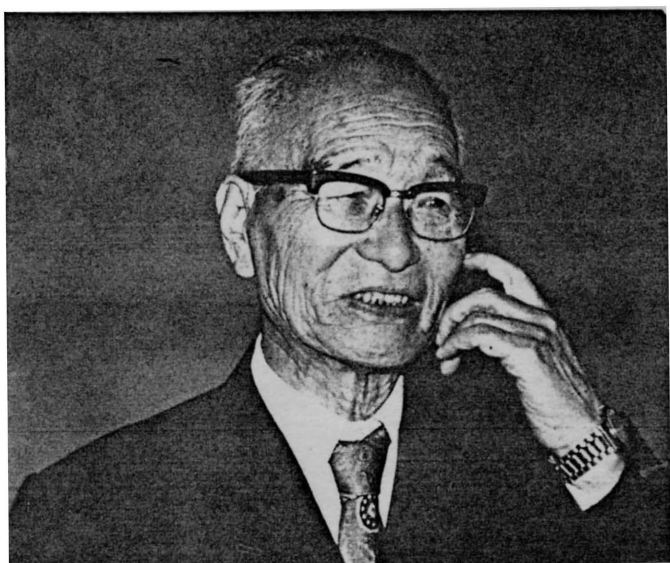
OSAMA

船泊海岸 醫學士

富士山

祖父母の江戸

おれ、代三介



佐佐木茂索君

芥川龍之介

染雲奉誦 山本改造かへりて後、黒パンを食ひすぎて又々一日三四回下痢し、再び富士さんの御厄介に相成候所、僕の胃腸の如きは薬餌療法では駄目なりと言はれ、悲観する事少からず。それでも兎に角薬を食ひ、やつと下痢だけとまることを得たり。海水浴をする土地にゐながら海へもはひれぬほど悲惨なるはなし。おまけに僕の家の前はヴァイオリン、後はラヂオと蓄音機、左はラッパ、右はハアモニカ、後の又後は鼓と鼓、と云ふ始末故、都合がつけば西海岸へ引き越さうかと思つてゐる。兎に角體を恢復するのは一事業だ。鎌倉へもちよつと行つて見たいが、足が廢足になつてゐるので三四丁歩くとへこたれてしまふ。尻へはもう尾テイ骨が出て來たよ。勿々

二仲 この手紙を書き了つた時、西海岸の家ふさがりしことを知る。懽然たり。そこへ君の本が来る。箱張りは餘り感心せず。見返しはよろし。しかし概して装幀は内容よりも落ちかと思ふ。影などどうまいもんぢや(コレハ室生調)

古老に聴く 鶴沼の昔口・パート2

編集委員 遠 藤 隆 二

野 口 ゆくえ

大正から昭和に変わる頃、藤沢駅の南口は、今ではとても想像できない程、人家が少なく、駅前から江ノ電が出ていたが、今の地下道は踏切になっていて、北の遊行通りから、石上へ行く一本道が通ってました。・・・〔注〕この記述は、鈴木武夫さんが当時のおぼえとして自作の「藤沢駅周辺の地図」を参考にさせていただきました。・・・石上の通りは、東側は踏切のすぐきわから、田口デンキ、武相、須藤酒店等の商店が続いており、西側には、道に沿って石川ソバ、まかべや、駄菓子屋、鎌倉や等があって、裏は砂山で材料置き場になっていた。石川ソバ屋と線路との間はかなりあって、砂山の後ろは駅前広場につづいているが、江ノ電の駅まではなにもなかった。江ノ電の向こうは今の橘通りになるが、商店はなく、通りに沿って通称「カタン工場」と言っていた製糸工場があった。その先には実科女学校がありましたね。「カタン工場」とは、正式には片倉製糸の工場だったでしょう。実科女学校とは、相模実科女学校だったと思います。今の順天医院辺りから駅へかけては、小高い砂山があり、松も生えていました。たしかこの砂山だと思うんですが、狐がいて、狐の穴があちこちにあり、私なんかオモチャ屋で火薬買ってきてパチパチと穴の中をいぶして遊んだりしたので、とうとう狐は逃げてしまっていました。藤守稲荷？とかいうお稲荷さんの狐が、今の日本精工の辺りの踏切で人をばかしたなんて話が有った頃のことですからね。その砂山の下の窪地みたいな平らな部分にレンガで造った製糸工場があったんです。昔は、糸巻にした木の太い軸の、車の形したものがありませんね。真ん中に穴が通っていて、輪ゴムをとおして、両側に割り箸を折ったやつを当てがってカタカタ動かして、子どものとき遊んだでしょう。あの時代の製糸工場ですから、カタン工場と言ったんでしょう。木綿の糸を作っていたんですね。神奈中のバスの車庫か工場があったのは、その後です。今取壊し中の元国鉄の官舎はその当時もありました。私たちは藤小を出て、私は県立商工実習へ行ったのですが、大船寄りに、今の正堂、昔のジャンボといったビルができる前、あの場所にその頃トミー・ポートという東京醸造の会社が

あったんです。そこが野球が強くて、中村って人が社長で、強い選手を探してきてチームを作り、盛んにやっていました。今でいうノン・プロですよ。そんな時代でした。

その頃の石上通りは、細いじめじめした感じの陰気な通りで、今JRのガードをくぐっている県道はまだできてなかった。大船寄りで藤沢と繋がっている道は、川名のところの踏切の道で、北は境川の東側の一本道を舟久保から御所ヶ谷を経て東海道を横切り、遊行寺の門の前の通りになるんです。南は、今の新林公園の前を通り東京螺子の前から片瀬に至る旧道だけでした。今の市役所のところは、若尾山っていう砂山でしたし、山内病院のあたりでは、野球ができたんです。それよりあそこには、大相撲の地方巡業が来た時、興行も出来た場所なんです。東京螺子の工場は戦争中は、軍需工場になり、兵器の部品を作っていたんですが、戦争の終わらないうち、川を越えて今の市民会館の辺り一帯を買ったんです。工場の裏山を崩して拡張したんですが、とうとう橋を掛けて、あの辺の田圃をその土で埋め立てを初めたわけです。トロッコまで使ってね。そして、戦争が終わったあと市が買ったんでしょう。市の授産所があったあたり迄は、螺子が埋め立ててしまっていたものなんです。それからずーっと東海道線の南側の線路沿いの僅かな人家のある辺りまでは、田圃のままでした。その埋め立てた所は、終戦後の新制中学で、市立片瀬中学の校庭になり、今の南図書館の北側には校舎ができていたんです。その頃には県道ができてましたが例の田圃は黒ぐろとした深田でしばらくはその儘でした。昭和40年代に市民会館ができ、中央図書館はすでにできていて、中学は片瀬山に移ってしまっていました。いつの間にか田圃も東急の高層マンションになり、駅南の都市開発で今のように変貌してしまったんですね。

さて、藤沢市民にとってわすれられないのが、秩父宮のことです。昔は藤沢駅から鶴沼の方面は家がまばらで、千坪に一軒とかって具合ですから、藤沢の子どもたちは、あまり行かなかったものです。秩父宮は体をわるくされて、御殿場から、鶴沼は療養によい土地だからと転居してこられたのです。秩父宮は、昭和6-7年には3連隊の中隊長か大隊長で昭和7年の5・1・5事件では、部下が首謀者で秩父宮の隊の兵隊を使って実行したために、責任をとらされたことがあります。落語の小さんは兵隊で参加させられたくちです。下士官は曹長あたりまで、処罰されたそうです。そして、当時の第一師団も満州へ移動さ

せられた。そのような経緯があった頃、体をそこねて御殿場におられたが、あそこは冬寒いで、今の天理教の場所ですが、あそこに別邸をもとめられて、その後、とうとうそこで亡くなられたんです。4-5 年はおられたでしょう。浜の風がああ辺りまでくると穏やかになり、松も沢山あるしということで、ああ辺りを物色されたんですね。ああ屋敷は白ボタンと言う化粧品会社の別荘だったはずですよ。秩父宮の療養なさるに都合がよい部屋だけは増築し、買い取られたんです。滞在中には、妃殿下とご一緒に近所の魚屋さんや、八百屋さんに買物にみえたようです。それらの店には秩父宮御用達の看板をかけてました。いまでも、橘通りの郵便局の並びの魚林さんには保存してあるんじゃないでしょうか。お金は持ったことはなく、値段も全然気にされずに買う物を決めて配達を頼まれ、あとで御用人でも支払いに来たのだということです。そして、お亡くなりになった時、藤沢の下水道工事が石上から実施中でした。土管がごろごろしてたところへ天皇はじめ皇族がおみえになるっていうんで、その儘埋めちゃって、一晩でアスファルトの簡易舗装にしてみました。陛下がおいでになるときは、道筋も綺麗になり、お車は踏切を通り石上通りを、今の公園のところから横に折れて秩父宮邸までおいでになった。まだ、橘通りはできてなくて、ヨーカ堂の県道も無かった頃ですよ。お通夜からご葬儀まで、ああ場所でなさいました。高松宮、三笠宮から皇太子（今の天皇）もみえたのではないのでしょうか。ご出棺の道筋では、干し物も出してはいかん、門を閉じて家でじっと籠もってなくてはいかんといった具合でした。警察では、危険と思われる人間のリストを作り、ふらついたりする精神異常者も通りに出ぬよう、嚴重に取り締まったそうです。世間には、なにかあると、浮かれて飛び出してくる厄介者がいますからね。霊柩車は今度は橘通りの道筋を駅までお送りした記憶があります。全部舗装したんですよ。その頃は駅から魚忠さんの角あたりまではまがりなりにも商店やら人家があったくらいで、人通りの少ないさみしい通りだったよ。そもそも、橘というのは人の名などからとったのではなくて、このあたりを花立と称していたんです。旧番地に花立というのがありますが、恰好が悪いってんで橘の字を使ったそうです。大きな地所のある邸もポチンポチンと有って、あとは桃畑でした。昭和15年に市になった頃に、橘通りとなったんじゃないでしょうか。今の郵便局の先でどんと突き当たり、高瀬通り、宮崎通りから熊倉通りと続いていくのです。昔のことですが、私は

ずーっと橘通りに住んでいまして、かって入営するときも在郷軍人が総出で送ってくれて野砲兵第一連隊に入った。世田谷にあり、あの当時5人とられたとすると、2人は原隊であと3人は満州に送られたんです。その年12月に入隊した連中は、体を壊すからと、翌年4月に満州に送られたのです。（寺田）私は竹橋の近衛に行ったんです。輜重兵で馬を使う方です。（鈴木）10年に満州に行き、2年いて除隊して帰ってきた。12年に戦争が始まったんですが始まる前2月に除隊してしまった。なぜかという、その年の甲種合格の兵隊が入ってきたが、兵舎が狭いので古参兵は除隊したんです。2-3ヶ月遅れれば、何処か送られていたでしょう。3年兵だと軍隊では「がら」が悪くなりますからね。その後すぐ14年に召集され、世田谷の野砲1連隊にまた入った。その後兵科がなくなり、襟章は13という数字に変わったんです。

兵隊の話はこれくらいにして、鵠沼は、最初江ノ電の沿線から開けたんでしょう。江ノ電の鵠沼の駅から、海岸へ来る道は、道らしい道はなかった。小田急が引けて、海のほうが発展する前は、大曲りの道しかなかったと思う。私が思い出すのは、松島園のことで、当時轟さんというお医者さんの前の通りが江ノ電からずーっとあつて、あとは小松が植わったきりで、なにもなかった。中原さんという大工さんがたった一軒あって住宅など建てはじめていたくらいです。松島某という不動産屋と思うが、その人が買った一帯を松島園と称していた。植木屋の山口とらのすけという留守番の人がいて、たいそうな権限を持っていた。当時私は植木の材料とか、丸太何百本とか車に積んで運んだことがあるんです。馬力がなくて、大八車でした。山口さんの二号さんがいて、「疲れたろう、大変だったろう。」とよくねぎらってくれた。私など丁稚小僧だったが、きれいな人だなんて思った。あそこは松島さんが道路作ったのかな。住居表示ができる前、鵠沼番地のところは、随分広くて、番地だけでは何処だか判らないから、天金通りとか、大曲りだとか通称で見当をつけていた。大曲りが有名になったのは、広田弘毅さんが住むようになってからで、お巡りさんのいる箱番ができ、江ノ電からずーっと舗装が出来てしまって、広田通りといわれていた。当時、戦争中でしたが、外務大臣や総理にもなった人ですからね。あの反対が小田柿さんで、ヤクルトの松園さんの屋敷などは小田柿さんの地所だった。菊本さん、松本さんで、大曲りの角から鵠沼駅までは、3-4軒で片側ずーっと持っていた。敷地は片瀬川

(境川)の岸まであり、川の水を邸内に引き入れ小舟の船着き場もあった。冬だけとか、お正月だけ遊びにきてたんでしょう。坪1円から1円50銭くらいで買えたんですね。2号さんなんか住んでたこともあったでしょう。その反対側には井上さんとか、~~サンプ~~^{サンボ}ビールの馬越恭平さんの屋敷があって、井上さんはそんな古い人ではないが、大きな屋敷持っていた。郵便局の向かい側に駐在所があってお巡りがいた。菊本さんたちが買った頃は郵便局は無かった。本多さんという医者のところも菊本さんの地所のはずです。その頃は、海には”わたり蟹”とかいった蟹が、海の水と川の水が混じり合っているところにいたものです。モクタカニとも言ったかな。『月夜の蟹は身がない』とかで、闇夜でないと蟹は取ってはいけないとかね。弁慶蟹と言って鉄の赤い蟹はよく見掛けましたよ。工場とか家庭の排水が多くなると、汚水が増えて、海岸に住む穴も作れなくなっていなくなりました。皇大神宮の向こう側に川というより、田の用水の流れが有って精工の堀に沿って流れていた。うなぎやドジョウなどがいて、雨か降ると水が溢れ、道いっぱいになったものです。今の烏森公園のあのあたりでしょう。昔は神宮の地所は今の倍以上あって、その一部は今の精工の中にいい加減はいつているでしょうよ。あの辺は雑木林は無くて大樹ばかりに覆われて椎だとか、常緑潤葉樹が沢山有った。たぶの木など日陰でも関係なしに大木になりますからね。いまこの種類の大木は江ノ島にしか残ってない。昔は大風が吹いたから、支根が張った木しか残れなかった。

引地の大福のお話をしましょう。鵜沼の北端で、東海道にかかっている引地橋のちょっと手前に大福屋があった。たしか、加藤といって昔から有名だった。大きな大福でね。あの頃は、店で売るのに二つずつ重ねておいてある。こんもりしたのがいまの大福だが、あれがべしゃんこで、買うとき、ふたつひと組ときまっていた。馬力を引いた人達があそこで弁当の代わりに買うんです。いっぺんに五っ山買い、食ってしまう豪傑もいたようで、馬を引っ張りながら、ぺろぺろって食べてしまう。皮は薄いから餡こばかりです。大福屋で買って橋を渡り、坂をのぼり今の三楽あたりで、袋をすててしまう。という見たような話があるが、橋のたもとにある店は、峠の茶店のように、一休みしたり一服して、食事をするに都合がよく出来ていたのでしょう。藤沢あたりで、一仕事終えて、帰る際、丁度昼飯どきになるような場所だったのですね。昔の人はよく働いたものですからね。農家

で”こえ”（しもごえ）とりに行くのでも、夜あけの3 時ごろに起きて鎌倉までとか出掛け、人の起きる前に汲み取りしてしまう。人が眠っている間に、臭い仕事を終えてしまうんです。牛に引かせた車に五っ六つ積んだ下肥えを入れる専用の樽を積んでいった。細長い特殊な樽で、二荷担いできた下肥がいったんに入ってしまう大きさのものです。牛車では沢山積めないから、川を利用して舟で運んだりしたそうです。

まだまだ思い出せば、きりがありませんから、このくらいで止めときます。

おわり

〔追記〕

この談話は、平成2年11月26日に、「鵜沼を語る会」の会員である寺田良夫さんと鈴木武夫さんのご両人から、お聞きしたものを読みやすくまとめました。

ご読了後、お気づきの点などありましたら、編集委員あてお申出ください。

「鵠沼」平成3年3月5日58号

平成3年 3月5日 発行

鵠沼の湘南学園について。

富士山のあらまし。

古老に聴く鵠沼の昔古パート2。

発行所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話33-2001

発行人 鵠沼を語る会代表

塩沢務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33